りれー随筆

186

「出会い」が私の宝物

三村 春美

助産院HARU・レディース＆マタニティ倶楽部（長野県塩尻市）

私たちには生まれてから死ぬまでの間に，いったい何人の人との出会いがあるのでしょうか。一生のうちにたった一度出会っただけのこともあれば，その人との出会いが自分の人生を大きく変えてしまう，そんな大きな出会いもあります。助産婦という仕事は，人との出会いの連続のなかでこそ生かされてくる職業なのだと，この頃しみじみと感じています。

助産婦としての私

助産婦学生の頃の私は，途中で心身ともにくたびれてしまい，周りのみなさんに大変ご迷惑をかけながらなんとか卒業できたという，情けない学生でした。そんな私を最後まで支え続けてくれた同級生や先生方のおかげで，現在の私があると思っています。あの時，途中で投げだしていたなら，私の人生は大きく変わってしまっていたでしょうし，助産婦としての活動もなかったわけですから，感謝の気持ちでいっぱいです。

卒業後は町立の総合病院の産婦人科に勤務し，先輩助産婦と自然分娩を大切にする医師に恵まれ，ヨチヨチ歩きながら助産婦としての道を歩みはじめました。毎回緊張しながらの分娩介助でしたが，無事に生まれた赤ちゃんの産声を聞いた時のよろこびと安堵感は，今でも鮮明に記憶に残り，一人一人の出産を思い出せるくらいです。

病院勤務時代は他職種の人々との交流もあり，楽しく不満もありませんでしたが，三交替という生活が，もともと不眠症気味だった私には辛く，また子どもを望んでいたこともあり，わずか6年で退職することになりました。先のことは何も考えないままやめたので，不妊治療に専念するのでもなく，再就職先を探すわけでもなく，ふつうの専業主婦となり，のんびりと暮らす毎日でした。

しかし，それも3か月も続くといよいよあきてきて，何かしなければと思っていたところに市の保健センターでの補助的な仕事の話がきました。そこから，地域での活動がスタートしました。

地域での助産婦の立場

助産婦の資格があれば何かできるはずだろうと安易に考えていた私にとって，地域での活動で，「助産婦」の存在の無さをはじめて痛感することとなりました。私にまわってくる仕事は受付け的な仕事であったり，乳幼児健診でも体重測定など，誰でもできることばかり。助産婦としての知識を生かせるわけでもなく，アドバイスできる場もなく，お母さんたちからも求められないさみしさ。「助産婦って何だろう」という疑問が，頭の中をぐるぐると回ります。病院で働いていた頃は助産婦としてふるまい，期待もされていた——。なのに，今は何？

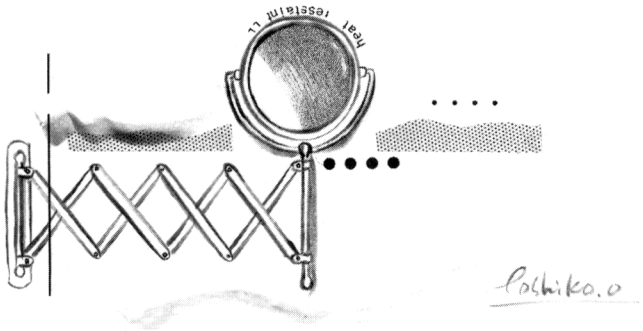
ガラガラと，自分自身の助産婦アイデンティティーが崩れ落ちていきました。病院という中だからこそ助産婦でいられたことに初めて気がつき，「もう何もないんだ，今ここにいる自分だけ」とそう思った時に，開業しようと決心しました。

開業助産婦としてのスタート

強い意志があってという訳ではなく，行政の中

© IGAKU-SHOIN Ltd, 2013

2026/10/06 09:37:21



では自分を生かせる道がなく，開業するしか方法がありませんでした。起業家としての能力もなければ，「母乳相談」と看板を掲げるほどの自信もありませんでした。では，どうしようか――。そこで，妊産婦さんたちが楽しく集まっておしゃべりするクラブ活動の延長のような，気楽な安心できる場所，女性の一生をサポートする場所として「HARU・レディース＆マタニティ倶楽部」と名付け，平成5年の30歳の誕生日に開業届けを出しました。

保健所の担当の人が手続きがわからないと慌てているくらいに，長い間，助産院の開業届けが出ていなかったようで，「めずらしいことをしますね」と言われました。届けを出せばこれで開業はできますが，母乳相談を前面に出しているわけでもなく，はたして仕事の依頼なんかあるのかと，内心は不安でした。

前年から市の保健婦さんと交流ができていたことが幸いし，市町村の母子保健に関する仕事などは保健婦さんの横のつながりで紹介していただきました。助産婦学校の先生が紹介して下さることもあり，ひとつひとつの仕事にきっちり取り組んでいくことが，また次の仕事につながっていくことなのだと肌で感じました。信用あっての仕事ですので，いつまでも初心を忘れず，出会いを大切に，そしていつでも感謝の気持ちを忘れないようにと，そのことを胸に刻んでの毎日です。

地域で仕事をしていると，様々な仕事がとび込んできます。仕事の依頼がきてから慌てて勉強し，何とか間にあわせるということが続き，自分の不勉強を思い知らされることもありました。

4年ほど前のことですが，ある中学校から「生命の誕生」についての講演をしてほしいと依頼されました。思春期の勉強など十分でなく，300人も前に話をする自信もありませんでしたが，「生命の誕生なら助産婦で」と引き受けました。当日は体育館に反響する自分の声に汗をかきかき，スライドと赤ちゃん人形に助けられ何とか終えることができました。しかしこれはいけない，と思春期保健相談員のセミナーを受け，学校の先生の性教育のサークルで勉強させていただき，関係図書を読みあさりました。おかげで今では学校や公民館での思春期の性教育講座に講師として呼ばれる仕事も多くなりました。子どもにも大人にも赤ちゃんの話は大変受けますし，助産婦としての力をこんなところで発揮できることになろうとは、思いもよりませんでした。

最近では，新生児訪問を担当するなかで，身近にも虐待の問題があることを実感しています。助産婦として学びながら，もっと真摯にかかわっていきたいところです。

妊娠・出産という人生のスタートにかかわる助産婦であるからこそ，思春期の望まない妊娠，そして虐待など，様々な問題点を予防したり，早期発見もできると思います。今ほど助産婦ががんばらねばならない時代はないかもしれません。働いている場所は違っても，それぞれの場所で，助産婦らしくありたいですね。

次回は，看護学校の同級生で開業助産婦としては同志の渡辺明美さんにバトンを渡します。

2026/10/06 09:37:21